日蓮教学用語としての「事具三千」の成立について

――『円極実義抄』の撰述問題を通して――

三浦和浩

はじめに

『円極実義抄』は上下二巻からなり、上巻は現存せず下巻の写本（文明八年・一四七六年、日授師の奥書在り）が常在寺（山梨県富士河口湖町小立）に格護されている。本書は日蓮聖人（以下宗祖）滅後の最も早い時期における本迹論の書として注目され、迹門不読論とも関連して非常に強い調子で本勝迹劣論が展開されていることで特に知られているところである。

本書の作者については、巻末に「本門寺沙門天目集記」とあり古来より天目師（一二五七？―一三〇八または一三三七？）[1]の撰述と伝えられているが、巻頭には「日弁記」とあることから日弁聖人（一二三九―一三一一）の撰述であるという考え方もなされている。[2]

また、本書において作者同様に問題なのは、その成立時期について詳らかでないことである。本文中の記述から成立時期を考察すれば「正安二年五月十日已来、天目身命を惜しまずして散散に彼の老僧等を破失するなり」[3]とあることから、正安二年（一三〇〇年）以降、天目師が本門寺で寂する延慶元年（一三〇八年）（あるいは延元二

年・一三三七年）までの成立と、一応考えることができる。

しかし、執行海秀師は本書の成立を日授写本の奥書にある文明八年（一四七六年）頃と考える堀日亨師の説を紹介する形で本書の天目／日弁撰に疑問を呈しており[4]、また近年においては布施義高師が、天目師あるいは日弁師の時代の成立では早すぎるとした上で[5]、日陣師（一三三九―一四一九）の講義を日台師が筆録したという『雑問書』（一四〇四～五年）に『円極実義抄』の書名とその一節が掲げられていることに注目し、少なくとも日陣師の頃には本書が天目師の書として日蓮門下に知られていたと指摘している[6]。

このような『円極実義抄』の撰述年代をめぐる議論において重要な論点の一つに挙げられるのが、その中で使用されている教義用語の成立時期の問題である。例えば望月歓厚師は「本迹一致」の語が用いられた最初の例として本書を挙げており、それによって教義用語としての「本迹一致」が宗祖滅後五十年前後の成立と見ているが、これは裏を返せば本書の成立を宗祖滅後五十年前後、すなわち一三三〇年頃と推測しているということに他ならない[7]。また、「三大秘法」という語の使用も日蓮門下の文献上最初期のものとなるが、執行海秀師は「三大秘法」という成立をやはり宗祖滅後五十年頃であるとして、本書の天目集記を疑っている[8]。

ところで、本書には「事具三千」という語が二箇所において用いられているが、本書が真に「天目集記」であるとすれば「事具三千」の語の初出が本書となることは、これまで注目されてこなかった。

株橋日涌先生の『観心本尊鈔講義』に依れば、諸法実相たる三千を理具一念三千というのに対して、事具一念三千は「仏陀釈尊が久遠劫の修行によって三千の法を覚証して而して十法界の依正万法に具現したもの[9]」であるとされ、さらに「本門の実相たる事具三千は（中略）本因九界と本果仏界と十界互具し、更にこの本時十界の正法と本国土の依法と依正互融して始めて成立するものである[10]」と規定されている。また、この事具一念三千と総

名妙法蓮華経との関係性については、「一往は名体一如の法体ではあるが、再往は能摂・所摂、総別の相違があり、別体たる事具一念三千は在世脱益の法体であり、総名妙法蓮華経は末法下種の要法である」[11]とされ、日隆聖人の『弘経抄』[12]を引きつつ、事具一念三千と総名の題目との一往同・再往異を強調されている。

このように、事具一念三千は日蓮教学上の最重要法門のうちの一つであるが、その概念自体は宗祖遺文中に明らかに存在するものの、「事具一念三千」「事具三千」という教学用語が宗祖御遺文中に一切見当たらないということは周知の事実である。また「事の一念三千」という表現に関しても、『諸法実相鈔』、『義浄房御書』、『成仏法華肝心口伝身造鈔』、『当体蓮華鈔』の四遺文の合計五箇所に見られるに過ぎず、しかもこれらは全て真蹟が存在しない遺文である。[13] 門下諸師に目を転じても、例えば六老僧日興撰『引導秘訣』[14]や同『五重円記』[15]に「事一念三千」が見えるが、これらの文献は偽撰の可能性が指摘されているし、[16] 同様に、日興撰と伝えられる『御義口伝』や、あるいは六老僧日向撰とされる『御講聞書』にも「事一念三千」が見えるが、これらも後世の他師による述作と見られるものである。

一方、視線を中古天台文献へと移してみると、宗祖と同時代に既に「事具一念三千／事具三千」の語が用いられていたことが分かるが、これは中古天台と日蓮教学との関係を考える上で大変興味深い事実である。[17]

兎にも角にも、宗祖御自身がその語を使用していないということから――「事の一念三千」に関しては判断を保留したとしても――少なくとも「事具一念三千／事具三千」に関しては、宗祖滅後に出現した用語であると考えられる。[18]

そこで本稿では、日蓮門下諸師の文献、及び中古天台文献における「事具一念三千」等の語の使用例を調査することでその特徴を分析し、それらが『円極実義抄』に対応するか否かを検討することをもって、本書の成立に

ついて考察を加え、さらに日蓮教学用語としての「事具一念三千／事具三千」の語の起源に迫ってみたい。

一、中古天台における「事具三千」の使用例

「事具一念三千／事具三千」の語は、日蓮門下に先立つ形で既に中古天台文献において用いられていた語である。そこで『円極実義抄』中の「事具三千」の語について検討する前に、中古天台文献における「事具一念三千／事具三千」の語の使用例を確認しておきたい。

①『漢光類聚』伝忠尋（一〇六五―一一三八）（実際には粟田口静明以後、一二五〇年以降の成立）[19]

予先師に隨って一念三千の深義を伝ふるに七重有り。一に仮名の一念三千。（中略）二に円融の一念三千。（中略）三に理具の一念三千。真如の一理広大也。此の心性の一理隔無きが故に十界互具して三千と成る也。四に事具の一念三千。謂く我等が自性本より三千具足する也。別して事を理性の融通に寄す可からず。五に本性の一念三千。（中略）六に不思議の一念三千。（中略）七に自己の一念三千。

（『日仏全』一七巻、七〇頁、上段）

これは伝忠尋撰『漢光類聚』の七重の一念三千義を示す箇所であるが、その中の第三に「理具一念三千」が、第四に「事具一念三千」が示されている。ここに言う「理具一念三千」は、真如の一理が十界互具して三千となるということであるから、それは、宗祖が「ただ理具を説くのみ」とした迹門を面とした時の一念三千と同義のものと考えられる。一方、「事具一念三千」の説明には「我等が自性本より三千具足するなり」とあることから、『漢光類聚』の「事具一念三千」は衆生が自性として本来的に一念三千を具しているということを示すものと捉

えることができる。これは、いわゆる本覚思想の上で捉えられるべき性格を有するものと考えられるだろう。

②『大日経疏指心鈔』頼瑜（一二二六―一三〇四）（第七巻奥書に建治四年〈一二七八〉とある）

天台既に事具三千を談ず。（『大正蔵』五九巻、六六二頁、下段）

『大日経疏指心鈔』は真言宗新義派の頼瑜による『大日経疏』の注釈書であるが、この部分は四明知礼の『十不二門指要抄』から「的しく一念を指す。即ち三法妙の中特に心法を取る也。応に知るべし心法は迷に就き事に就て而も弁ずることを」（『大正蔵』四六巻、七〇六頁、中段）の文を引いた上で事具三千を用いたものである。この『十不二門指要抄』の文は、一念は真心か妄心かという問題設定の中で、妄心であることを主張する場面で引用されていることから、ここで頼瑜の言う「事具三千」は衆生の妄心に三千を具すことを意味するものと思われる。この場合の「事具」も『漢光類聚』と同様に、本覚思想的な意味合いを帯びたものと考えられよう。

③『宗要柏原案立』貞舜（一三三四―一四四二）（応永年間〈一三九四～一四二七〉の成立）

之に依て華厳経に云く　心は工みなる画師の種種の五陰を造るが如く。決の五に之を引て云く心造と　言ふは二意を出でず。一には理に約せば造即ち是れ具。二には事に約せば三世を出でず。又止の五に理境修境を立つ。理境の三千は理具三千。修境の三千は事具三千也。（『大正蔵』七四巻、五四四頁、中段）

『宗要柏原案立』は先に挙げた二書から時代が下った室町時代の論議書（宗要）である。著者の貞舜は近江柏原の成菩提院に談義所を開いた人物で、成菩提院は「柏原談義所」の名称で日本国中に喧伝され多くの天台僧がここに学んだという。[20] ここに引用した文は、「十界互具は事理共にこれ有るべきと云う事」についての言及で、ここでは『華厳経』の「心如工画師」の文を引いて、理だけでなく事においても三千を具すという意味において「事具三千」の語が用いられている。こちらもやはり衆生が事実として一念三千を具すという意味において「事

具三千」を捉えることができる。

このように、中古天台における「事具三千」は、概して一念三千が凡夫の当体において既に具されていることの表現なのであって、日蓮教学的な本門所説の実相（法体）としての一念三千を指すものではなかったと言える。

二、『円極実義抄』における「事具三千」

日蓮門下において「事具三千」の語が初めて使われた（と一応考え得る）のが『円極実義抄』で、次の二箇所に使用されている。

①当に知るべし本門は理常住なるが故に事常住也。事常住なるが故に本門は事具三千を以て所観の境と為す。

（『宗全』一巻、六九頁）

これは、「在世の当機は迹門の十如実相を観じて仏知見を開くのに、どうしてあなたは迹門を未得道教・邪見教・覆蔵教等としてこれを破すのか」という問いに対する答えの中の一文である。この問いに対して『円極実義抄』は、「迹門は教主已に始成を説く故に、仏界所具の十界倶に是れ本無今有の十界互具・百界千如・一念三千なり。是れ随他意の説に約して、真実の一念三千にあらず」とし、「ただ本門の円法を名づけて善となす。善く実相に順ずるを名づけて道となす」[21]と、教主論、実相論における本迹勝劣の義を示している。

こうした表現は、『観心本尊抄』の

また本門十四品の一経に序・正・流通あり。（中略）その教主を論ずれば、始成正覚の釈尊にあらず。所説の法門もまた天地のごとし。十界久遠の上に、国土世間すでに顕る。一念三千殆ど竹膜を隔つ。

や、あるいは、『開目抄』の

（『定本遺文』七一四頁）

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て尓前二種の失一ッを脱レたり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。尓前迹門の十界の因果を打やぶッて、本門十界の因果をとき顕す。此レ即チ本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真ノ十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

（『定本遺文』五五二頁）

を内包するものと捉えることができる。すなわち、ここに言う「事具三千」は、教主の久遠成道（発迹顕本）が説かれることによる「本因本果」を基礎とする概念であると読み取ることができる。

また、「事常住なるが故に本門は事具三千を以て所観の境となす」という表現をもって、事具一念三千を本門の「所観の境」（実相）と規定している。ただし、「本門＝事常住」は全き現実肯定を意味する中古天台に特徴的な用法でもあり、これは『円極実義抄』に中古天台思想が流入していることを窺わせるものとして留意すべきである。[22]

②天台の一念三千は理観なり。本化大聖は事具三千の妙観ナリ。

（『宗全』一巻、八四頁）

これは、迹門修行の者の謗法なるを説く箇所に見られるもので、ここでは

次に本門経に至り爾前迹門の始成正覚を破し、四教の因果倶に壊れば、爾前迹門の十界の因果倶に壊る。昔より已来、未だ曾て顕説あらざる無始久遠の十界の因果これを説く。是れ則ち真実の本因本果の法門、久遠

実成の顕本なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に具す。本有常住真実の十界互具・百界千如・一念三千なり。

として、先に見た『開目抄』の表現に沿わせる形で本門の一念三千を説明している。

さらに、

故に知んぬ、寿量品の無始の三身は我が己心所具の無始の仏界なり。仏界所具の無始の仏界は九界所具の仏界なり。過去常住なれば三世常住なり。三世常住なれば本来本有の十界互具・百界千如・一念三千なり。

として、ここでも三世の「常住」が一念三千の根拠とされ、これを「本来本有」と表現している。

そして、

此の三千の理は一切衆生の本有の三仏性、妙法蓮華経の正体、久成の内証、三世諸仏の出世の本懐、終窮究竟の極説、能開の本妙、即ち是れ法華三昧当体の名にして譬喩にあらざるなり。故に本門の円を以て正直捨権の純円となす。

と、本門の一念三千を「法華三昧当体の名」と規定し、これも①の場合と同じく「所観の境」として捉えている。

こうした言説を経て、

天台の一念三千は理観なり。本化大聖は事具三千の妙観なり。かくの如きの妙境・妙智は正しく法華経本門寿量品の肝心、妙法蓮華経の五字の能開の極妙に依るなり。

と、「事具三千」の顕現は「五字の能開に依る」、すなわち法華経が「開会」の機能を有する最勝の教えであることによると結論している。

以上、『円極実義抄』の二箇所の「事具三千」の用例を見てみると、その特徴は、

i　本門の一念三千について、久遠成道（発迹顕本・本因本果）を基礎としている点で迹門の一念三千と異なるとする。

ii　それは本門の実相であり、所観の境である。

iii　「五字の能開」の働きにより、事常住であるが故に、本門の実相たる一念三千は本来本有のものとして己心に存在する。

と、このように整理できる。

三、門下諸師による「事具三千」の用例

①日睿師（一三〇九―六九）

日蓮門下において『円極実義抄』以降、本門の一念三千と「事具」を関連させて表現した最初の例として、保田妙本寺に学んだ富士門流の学僧である薩摩日睿師の『本迹問答十七条』がある（一三五三年日明による奥書）。ここには本迹一致論者の問者の言葉として、

本迹各別なりと云へども、一念三千の妙体等同なる故なり。理具・事具は別なれども、内証は一なり云云。

（『宗全』二巻、四六一頁）

とあり、一往釈として一念三千を事理に分別している。しかし、「事具三千」という成語はここには未だ見られない。

②日陣師（一三三九―一四一九）

日蓮門下の文献において『円極実義抄』以後初めて「事具三千」の成語が見られるのは、円光日陣師の『本迹同異決』（一四〇三年）の次の箇所である。

仏果已満に約しては事具の三千と云ひ、初地初住をば分具と定め、其の以前は凡夫に約しては理具の一念三千と判じ、機に約し行に約して、此の一念三千の種々散在の理あるを以て、両門の一念三千の正体に浅深ある処を明かさざる事は、大段教相を謬る故かと覚えたり。（『宗全』二三巻、二六三頁）

『本迹同異決』は六条本國寺日伝に対する批判の書であるが、ここでは一念三千を行位の浅深において、「事具」、「分具」、「理具」に分類する当時の一念三千説を示した上で、それらが本迹二門の一念三千の相違を論じるものでないことを批判している。つまりここで言う「事具の三千」というのは日蓮教学的な「本門の一念三千」を指す用語ではない事が分かる。

先述した貞舜の『宗要柏原案立』には「事具三千」の説示と関連して、妙楽の『弘決』から「仏果已に満ず。事に従て説くに已に十界を具す。初地初住は分に十界を具す。乃至凡夫は但だ是れ理具なり」[23]の文が引かれていることから、おそらくここに日陣師が示した「事具三千」は中古天台的な用法であり、日蓮教学用語としての「事具一念三千／事具三千」の成語はこの段階でも未成立であったと考えられる。

③日隆聖人（一三八五―一四六四）

今回調査した限りにおいて、日蓮門下において「事具三千」の用例はあまり多くは見られなかったが、その中で、日隆聖人の文献において「事具三千」の成語が多用されていることは特筆すべきであろう。確認できたものを列挙すれば次のようになる。

文献名	内容	所載
『四帖抄』（法華天台両宗勝劣抄）	「像法の中末に南岳・天台等出現して、迹門をもって面となし、本門をもって裏となし、百界千如・一念三千その義を尽くすと雖も、但だ理具を論ず」と判じたまえり。この理具三千をば止観の第五に委悉にこれを判じたまえり云云。然りと雖も、事具三千・事行の妙法蓮華経をばこれを残す。故に止観は有余不了の説なり。諸御抄並びに開目抄・観心抄等の意は、止観の本理三千をもって事の三千に摂し、もって妙法蓮華経に収めて末代幼稚の衆生の頸に懸けしむ。これ即ち本門終窮の極説なり云云。この事の三千をば修得の十界をもってこれを作る。謂く、二乗の成仏と久遠成道と九界仏界互具して三千を成ずるなり。開目抄に委悉なり。真間本尊供養抄には、「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」の文と、「然るに我実に成仏してより已来」との二文を引いて、一念三千を証す。観心抄の始めと中とには、「我れ本と菩薩の道を行ぜしとき」の文と、「我れ成仏してより已来甚だ大いに久遠なり」の文との本因・本果の二文を引いて、一念三千を証す。これを事具三千と云うなり。この三千の引証の文義は、恐らくは止観に分絶えて、独り日蓮聖人の己証なり。これ正像未弘の観心なり。	法全[24]日隆1―三二八頁
	道の仰せに云く、本門事具三千とは本因・本果をもってこれを作るべし。本因妙は九界なり。上行菩薩なり。本果妙は仏界なり。久遠釈尊なり。この本因・本果互具して界如三千を成ず。本門十妙の中に初めの因・果・国の三妙これなり。	法全日隆1―三二九頁
	かくの如く本門事具三千顕わるる時、十界の依正は即ち久遠常恒なり。この三千の功徳をもって妙法蓮華経に摂し、末代悪世の祈祷を致す事、先代未聞なり。正像未弘なり。	法全日隆1―三六一頁
	次に一念三千は玄文並びに止観の第四までこれを秘す最極の深法なりと云う事、恐らくは止観の一念三千は「今は法華の迹理に約す」と定判して、迹円理具の三千の分斉なり。猶を事具の三千に及ばず。何に況んや本門上行要付の最上の大法に及ぶべけんや。	法全日隆1―四一九頁

	この止観の三千とは、本因妙上行体具の九界と本果妙釈尊の仏界との十界の因果互具して、四土総在の久遠の娑婆本国土妙に住し、依正互融の事具一念三千を顕わしたまえり。		法全日隆1―五〇四～五〇五頁
	この御抄の初めと中に止観の第五の本末釈を引いて、立処は止観に依ると雖も、その意は開迹顕本して本門事具三千を釈せんとして、先ず無量義経・普賢経の二文を引いて粗仏種子を顕わし、次下の問に云く、「上の大難未だ聞かず」と云うより下に妙法蓮華経体具の二乗成仏・久遠成道をもって本門の事の三千を釈す時、寿量品の「然我実成仏已来」並びに「我本行菩薩道所成寿命」の本因・本果の二文を引いてこれを釈す。		法全日隆1―五二二頁
	同じく簽の十に云く、「本門は本因をもって元始となす」と云えり。本果をもって元始となさず。元始と云うは根本の種子下種の所なり。故に事相修顕の本因・本果に約する一念三千は修徳の下種と成る。故に本門に限ってこれを明かす。故に簽の一に「顕本を事円となす」と云って、「事円」とは云うなり。「事円」とは事具の一念三千の事なり。この事具三千の証文は天台・妙楽の釈中にこれを引証せざれば、余宗は申すに及ばず、結句生成の法華宗これを見て謗を致すべし。		法全日隆1―五二三頁
【二帖抄】（五時四教名目見聞　題号の下）	天台は理具三千を自解す。日蓮大士は事具三千を開発する事は、先代未聞の止観にも超過するなり。		法華宗名目見聞題号釈他三書[25]―四五頁
【五帖抄】（五時四教名目見聞　法華の下）	本門は父の種子も本仏大王なり。母は元より久遠周遍の円理実相なる間、父母共に上臈なれば所生の王子も十界久遠の上臈にして、父母和合する時に真実の一念三千・妙〇経を成すなり。謂く、父は即ち仏界、王子は三五七九の弟子、母は即ち諸経・法花経の円理実相、謂く所生所顕の法身なり。此の十法界に即ち十如を具し、互具を備ふ故に界如三千と成るなり。是れ即ち本門事具の三千なり。是れ下種の三千なり。		佛立宗義[26]書三―一九四頁

【法華宗本門弘経抄】	宗義に云く、妙法蓮華経と事具三千と同異の事は、常には教観の異と思えり。此の分もこれ有るべし。	隆全一[27]—一二七頁
	本因妙は名字信位なり。名字即は口密を以て実体となす。口密は事なり。故に事具の三千と名づく。此の事具の三千と南無妙法蓮華経と同体なり。故に事行の南無妙法蓮華経と称するなり。	隆全一—一二九頁
	就中観心本尊抄に、先づ初めに開目抄の如く本因本果を以て事具の三千を成じ、「当知身土一念三千○遍於法界」の文を以てこれを結成す。	隆全一—三三二頁
	諸御抄観心抄開目抄の意、本因本果を以て事の三千を成ずるなり。謂く本因妙とは釈尊の因行なり。釈尊の因行は上行、上行は九界なり。本果妙とは釈尊報仏果上の相なり。是れ仏界なれば、此の本因本果は修徳円満の十界互具・界如三千にて、事具三千とも十界皆成の根本種子とも云うなり。開目抄上下巻に委悉なり。	隆全一—三六八頁
	其の所観の妙法蓮華経体具の法相は事の本迹、即ち廃迹立本の事本、事本即ち事具の三千世間依正宛然・自受法楽の法爾の正像末、法爾の教機時国、法爾の迹本、法爾の迹化本化、法爾の付属、法爾の信謗、これを照しこれを観ず。	隆全一—四九三頁
	智は是れ父、境は是れ母妃、三周の声聞は是れ王子、父母子和合して理具の三千を成じ、止観に移して本理の三千と名く。又理具三千を以て本因本果本国土に裹んで事具三千と成して十法界の根本下種を顕わし、また妙法蓮華経に裹んで末代の易行を示す。	隆全三—四九一頁
	此の迹門の四一十妙を開迹顕本して、本因本果の父大王と三周の声聞等の九法界と十界互具して、事具三千・事行の妙法蓮華経を成ず。即ち本地の四一・本門十妙の妙法蓮華経なり。	隆全三—五三七頁

示して云く、事の三千とは本因本果の因果は事なり。故に従因至果の報仏は事仏なり。所居の本国土は久遠の娑婆なる間、事土なり。故に事寂光と云うなり。此の事の依正を以て三千を成ず。故に**事具三千**と云うなり。	隆全四―五一九頁
此の如き易行の観心は諸経に分絶えたるものなり。此の有相口密の観心を**事具の三千**と名づけ、事行の南無妙法蓮華経と称す。	隆全六―三五二頁
此の抄の意は、末代相応の本門の本尊は八品にこれあり。「以要言之」して上行に付す。所付の妙法蓮華経の袋の内に三千有り。三千は十法界の聖衆なり。十法界の依正互融すれば**事具三千**なり。此の事の三千とは、九界を以て本因妙に収め、仏界を以て本果妙となす。此の本因果互具して本因妙を以て面となし、本果を以て裏となして三千を成ずれば、事の三千・下種の三千・名字信行の三千なり。	隆全六―五二三～五二四頁
此くの観心抄の意は、迹門流通止観一部の理具三千を以て、本門流通本因果国依正互具の事の三千に裏み、種子の法を顕わして信智の者に擬し、又万人の為めに**事具の三千**を以て事行の妙法蓮華経に裏み、愚者に授けるなり。此の時は事理の三千は体玄義、妙法蓮華経は総名なり。	隆全六―五二六頁
故に本門の随縁真如の随縁は「大慈悲為室」なり。「顕本為事円」と云う事円も慈悲なり。諸御抄に「**事具三千**」「事行の南無妙法蓮華経」と云う事行も、「慈悲為室」の行と云うことなり。此の故に「本門は一向滅後のため」等と諸御抄にこれを判ずるなり。	隆全七―六五一頁
仍て本門をば「随縁真如」と云い、「顕本事円」と云い、「**事具三千**」と云い、「事行の南無妙法蓮華経」と云い、「有相易行」と云い、「四門総持の有門得入」と云い、「万行総持の一念信解の信行」と云う。此等は記の十の「本迹雖殊不思議一。雖一而本迹宛然。故云不二而二」と云える「理極事遍」の三千世間・依正宛然・寂而常照の重、貪体即覚体の「中々	隆全八―一六～一七頁

	に猶を里近く成りにけり、余りに山の奥を尋ねて」と云える「猶を里近く成る」本因妙名字信行の事具三千・事行の妙法蓮華経の本覚易行の教観の上に論ずる処の本迹は、事の本迹なり。殊に本門八品上行要付の本因妙信行所修の本迹は事相教相なり。観心本尊抄・諸御抄等は此の意なり。 又天台内鑑密本の事具の三千は止観一部の文底にこれあり。	隆全一〇—六九頁	
【開迹顕本宗要宗】	本門の十妙は初めに本因本果の事智を挙げて事の互具を論ずる故に、之を引いて事具三千を釈したまへり。観心本尊抄に本果妙をば釈尊、本因妙をば九界とも上行菩薩とも判じて、九界を総すれば上行、上行を別すれば九界なり。故に今は本因妙を以て九界と為し、本果妙を以て仏界と為し、事智に約して事具三千を成じたまへり。 又止の五に理境・修境を立つ。理境の三千は理具三千、修境の三千は密本即事具三千なり。これに依って決の五に云く、又此の理具変じて修具となる。一々の修具は理具にあらざることなし。此の如く止観一部に事・理の三千、事・理の互具これを明かして、事の三千・事の互具を取って観心本尊抄に移し、本因・本果・本国土に約して事具三千を成じ、猶を事行の妙法蓮華経に裏む間、当宗の意は偏に事の互具に約してこれを論ずべきものなり。 次に本門の意は、法身仏母の妙境の上に報応土民の父を発迹顕本して、久遠下種真実の父大王の妙智を顕わす父母境智冥合より九界の王子を出生して、十界久遠なる上に国土世間・本国土妙の事寂光顕現して、十界の依正は事に互具して、法々塵々が無作三身なる事具三千・事行の妙法蓮華経顕われたり。此れを随縁真如・事円の事具と云ひ、是れを貪体即覚体の本覚の事具とも云ふなり。故に本門の事の互具は勝れたりと云ふなり。故に父は種子を下し、母は調養・熟脱を致す。されば迹門の理円・理具は九界の衆生を熟脱せしめ、本門の事円・事具は三世の衆生に仏種を下す。仏種を下す時は九法界悉く王子にして地涌	宗要集(28)五—六頁 宗要集五—六頁 宗要集五—九頁	

の菩薩なり。迹中熟脱の時は又九界と顕わるる故に、久遠下種の時と今日本門八品・滅後末法下種の時分は事円・事具の三千なり。これに依って治病抄に云く、一念三千の観法に二あり。一には理、二には事なり。天台・伝教等の御時は理なり。今の時は事なり。観念既に勝る故に大難又色勝る。彼れは迹門の一念三千、是れは本門の一念三千なり。天地遥に殊なり云云。此の事具三千の相をば開目抄・観心本尊抄に本因本果本国土・依正・十界界如の事の三千これを判じて、事理不二の事行の妙法蓮華経に裹みて上行に付し、末世に授け、口に出して唱へしむ。口は事なり。是れ即ち「教弥実位弥下」の事具なり。

父母境智・事理一如の事具三千・事行の妙法蓮華経を観心本尊抄・開目抄にこれを移し、宗旨を成ず。謂く、迹門十妙の初めの境妙の十如実相を開迹顕本すれば、本門十妙の初めの本因・本果の智妙の裹にこれあり。日蓮大士はこれを引き、本門事行の三千の妙法蓮華経を成じたまへり。仍て治病抄の末に天台宗の理具三千と本門宗の事具三千の勝劣は水火なりと定判したまへり

宗要集五―一三頁

正像内鑑密本の本門流通の止観なりと云ふ辺は事具三千なり。此れを観心本尊抄に移したまへり。初めの止の五と終りの弘の五の本末の中間に経の本因・本果の十界互具の文を挙げ、次下に「今本時娑婆世界」と云ふより「己心の三千具足・三種の世間なり」と云ふまでにこれを判じ、開目抄の上巻に「未だ発迹顕本せざれば実の一念三千も顕われず。二乗○百界千如・一念三千」等と判じたまふ本因・本果の事具の三千分明なり。治病抄に迹本・事理の三千分明なり。又天台内鑑密本の事の三千とは、弘の五に云く「若し本門に約すれば我本行菩薩道の時を指して以て積劫となし、本成仏の時を以て妙悟となす」等と判じたまへり云云。此の如く観心本尊抄に天台内鑑密本の事具の三千を引証して、「此の一念三千も我等一分の恵解もなし」と云いて、「一念三千を識らざる者においては仏、大慈悲を起こして五字の内に此の珠を裹み、末法幼稚の頸に懸けさしめたまふ」等と結成したまへ

宗要集五―二二頁

り。仍て此の算の所詮は一念三千の事・理を顕わし、事具の三千を以て妙法五字に裹み、末代我等に授けんが為なり。	宗要集五―二六頁
本門の意は、事具三千と云ふは体理を以て裏に置き、本因・本果の宗玄義を以て面に立て、宗用体の本因・本果の事の三千を以て妙法蓮華経に総すれば、名実体仮の五義総在の妙法蓮華経の三密総持の口密の事行の妙法蓮華経なる間、意業の三千には勝れたるなり。	宗要集五―二六頁
故に本因・本果・本国土妙の事の十界、事の本国土・依正互具の事具三千なり。此の事具三千・事行の妙法蓮華経は三世の仏・菩薩・二乗・人天等の十法界の凡夫地の最初下種の易行の正法なり。故に本門八品を説いて上行に付し、末法下機に授けて口唱せしむ。口唱は事行なり。事行は有相行なり。事行の有相行は四門総持の有門より事行の三千妙法に入るなり。	

ここに示した通り日隆師における事具三千の語の使用はその数において他を圧倒しているが、例えば『開迹顕本宗要集』の「観心本尊抄に引証の止の五・弘の五の本末の一念三千は事具か理具か」という算題に「仍て此の算の所詮は一念三千の事・理を顕わし、事具の三千を以て妙法五字に裹み、末代我等に授けんが為なり」（宗要集五―二六頁）と言うように、題目所裹の本門の実相として「事具三千」の語が用いられている。[29] これは日蓮教学用語として用いられたものであり、日隆師以前の日睿師・日陣師に見られた用例とは一線を画すものであると言える。

なお、『開迹顕本宗要宗』は天台の論議書の体裁を採ったものであるが、そこにおける「事具三千」の用例が「雑部」の「十界互具」の項目において集中的に見られるのに対し、貞舜『宗要柏原案立』における「事具三千」の用例もまた「雑部」の「十界真実」という論題の元に展開されたものであったことは注目に値するだろう。

日隆師は応永二二年（一四一五）に美濃安八郡「下宮談義所」にて天台学を学び『法命集』を授かっている。また、『名目見聞』では貞舜の『七帖見聞』について言及している箇所がいくつか見られる。こうしたことから日隆師が柏原談義所の貞舜に直接学んだ可能性も指摘されているが[30]、そのような修学過程を経た日隆師が中古天台用語としての「事具三千」の成語に着目し、それを日蓮教学用語に転用したとしても不思議ではなかろう[31]。

④日忠師（一四三八―一五〇三）

このような日隆師の流れを受けた八品門流において、日蓮教学用語として「事具三千」が用いられることは全く自然なことと言える。妙蓮寺の日忠師『観心本尊抄見聞』（一四九二年）には数箇所の「事具三千」の用例が認められる。例えば、

今、此の事の一念三千の観心の観とは是れ信行観なる故に、聞くが如く信じ、信ずるが如く観ずるなり。此の信に依って事具の三千を悟るなり。（『宗全』九巻、五〇頁）

とあり、また、本尊論において、

仍て今此の題号の本尊は本門の本尊、事具三千の尊形なり。仍て事の一念三千は行者己心の具徳なり。（『宗全』九巻、五二頁）

あるいは、

仍て此の本尊に向かいて一念信心を生じ奉れば己心の事具の三千なり。（『宗全』九巻、五三頁）

とある。

なお、同じ八品門流では『台当異目深密抄』（本果院日朝師〔一三九四―一四六六〕撰述と伝えられるのは誤り[32]）にも二箇所「事具三千」の語が見えるが、これは『四帖抄』からの抜粋部分に見られるにすぎない。該当部分は

『宗全』九巻、一〇頁（『法全』日隆1―三二八～九頁に対応）

⑤日有師（一四〇九―八二）

日隆師と交流のあったことで知られる大石寺九世の日有師であるが、その著書とされるものは全て門弟の聞き書きであり、この『雑雑聞書』もそのうちの一つである（著者については不明）[33]。その中に、

仰せに云く、方便・寿量を読むは且く妙法蓮華経なり云云。其の故は事理の三千なり。此の事理の三千を読むこそ、ただ妙法蓮華経なれ。しかるに此の義を余門流には知らざるなり。総じて当流においてこれを意得るに、三重の沙汰あり。其れとは、迹門にして九界の権法を開して諸法実相の理の三千妙法を顕わし、本門に至って迹門十界の理具の三千を破廃して本門久遠の事具の三千を顕わし、さて本迹の事理三千を廃して事行の南無妙法蓮華経を顕わし給ふなり。（中略）此の三重を本門に至って見れば二重なり。本迹相望して沙汰すれば三重なり。方便・寿量の事理の三千は開近顕遠為教正主で、醍醐の正主にして、彼れは脱の一品二半の教主なり。さて独得妙名意在於此とは題目の五字、五味の主の御事なり。（『富要』二巻、一六六頁）

とあるところに「事具三千」の語が見える。これも日蓮教学用語としての用例であり、この時代になって八品門流以外でも「事具三千」の成語が用いられていることが窺える。

⑥日要師（一四三六―一五一四）

三河日要師は保田妙本寺十一世。日有師に学んだ富士門流の学僧で日忠師とも親交があり[34]、広蔵日辰師に日隆師の影響を色濃く受けていることを批判されたことで知られる人物である[35]。その『当体義抄見聞』には、

事具と理具との妙法の不同あり。迹門の妙法は理具、本門の妙法は事具なり。是れを余処には、彼れは迹門の一念三千、是れは本門の一念三千云云。

とある。「事具三千」の成語こそ見られないものの、本門の一念三千を事具と称していることには注目すべきであろう。

⑦日辰師（一五〇八―七六）

日要師や日我師等が八品教学の影響を受けているとしてそれを批判したのが広蔵日辰師である。その著作『観心本尊抄見聞』には次のようにある。

問うて云く、当抄科文の第一ヶ条に寿量の妙法所具の三千と云う義云何。答えて云く、寿量の妙法は是れ能開なり。一念三千は是れ所開なり。故に所具の三千と云うなり。問う、当抄の科文に天台の一念三千を取って観心とせば、理具の三千と云うべし。何ぞ事具と云わざらんや。答う、当抄の題号に後五百歳観心と云い、入文に我等受持此五字と云い、また我等己心釈尊と云い、また経云我本行菩薩我等己心菩薩界也と云う。既に我等と云う。知るべし、蓮祖並びに門弟を指すと云う事を。しかれば一念三千の実義は事具にして理具にあらざるか。

ここでは本門の一念三千について「事具三千」の用語を用いずに「寿量の妙法所具の三千」を用いることについて論じられている。

⑧日朝師（行学院・一四二二―一五〇〇）

富士門流においては日隆聖人と同時代に「事具三千」の成語が用いられ始めたようであるが、身延門流においても、日隆師と同時代の学匠である行学日朝師の『観心本尊抄私記』（一四七六）の中に、「事具一念三千」の語が確認できる。

御抄に云く、一念三千を識らざる者には仏、大慈悲を起こし、五字の内に此の珠を裹む等云云。（中略）二

には此の御抄の始終を見るに、天台の一念三千は理具なり。今家身延の意は事具の一念三千を建立すと云云。其の事具の一念三千とは当時未曾有の大曼荼羅是れなり。此の珠とは事具の一念三千なり。五字とは真浄の曼荼羅の総体なり。（中略）幸ひ身延の意は事具の一念三千を図して本尊とし給う上は、これを指すと心得て何の失あらんや。三には彼の一念三千は意業に限る故に理具と云云。今、此の一念三千は三業に亘ると見えたり。仍て三密平等なる故に事具の一念三千と云うなり。

（『宗全』一六巻、三七三頁）

四、小結

以上、「事具三千」の語について、その使用例について概観した。

まず、「事具三千」の成語が中古天台の用語として出現したのは十三世紀の後半であると考えられるが、しかしそれは、必ずしも本迹二門における一念三千義の相異を言い当てたものではなかった。そのことは、日陣師の言説からも窺い知ることができるが、その日陣師自身も本門の一念三千の表現に「事具三千」を用いていない。

ここでこれまでに見てきた事具三千の用例を時代順に整理すれば次のようになる。

漢光類聚・大日経疏指心鈔 ―― 衆生の妄心に三千を具す

円極実義抄 ―― 本門の実相・所観の境

事具三千 ―

宗要柏原案立 ―― 事実としての十界互具（事具―分具―理具）

本迹同異決 ―― 仏果已満に約す（事具―分具―理具）

日隆聖人以後 ―― 本門の実相を示す日蓮教学用語

この図の通り、『円極実義抄』を除けば、日隆聖人以前においては「事具三千」の語は中古天台の用語であったが、日隆聖人において日蓮教学用語としての「事具三千」の語の使用が顕著となった。そして、その門流にある日忠師にも「事具三千」の語が見えるようになり、また、日隆聖人の影響があったとされる富士門流の日有師、日要師にも「事具三千」の語が用いられているが、これらは全て本門の実相の意で用いられていることで共通している。

日要師の日隆教学への傾倒を批判した日辰師の言説からは、あえて意図的に「事具三千」の語を用いていないかのような姿勢も看て取れるが、それは「事具三千」が日隆教学の用語として認知されていた可能性を示唆するものであり、また身延系で本門の一念三千を「事具」と呼んだのは行学日朝師であったが、その時期は十五世紀後半の室町時代中期、即ち日隆聖人と同時期ということになる。

以上のことから推論すれば、日隆師が日蓮教学用語としての事具三千の語を多用し、それが日隆師を中心として周辺に拡散していったと捉えることもできよう。

それと同時に、『円極実義抄』が十四世紀初頭の鎌倉時代末期において（基本的には日隆師と同様に）本門の一念三千を「事具三千」と称し、なおかつそれを「本門の実相」と規定して、さらにその根拠を本因果国に求めるという本門の一念三千論を展開していることには、やや早すぎる感を覚えるところである。

但、一方で、日陣講説日台筆録の『雑問書』に『円極実義抄』の書名が引かれていることから、布施義高師が主張するように、遅くとも日隆師が活躍する直前の時期には本書が成立しそれなりに流布していたことになる。そして当然、日陣師が本門の一念三千を「事具三千」と呼ぶことを知っていた可能性は高い。しかしながら、にもかかわらず、日陣師の紹介した当時の事具三千の用例がそれとは異なっていることには些か疑問が生じる。

ここで留意すべきは、日陣師の披見した『円極実義抄』には現行の日授写本にない文言が存在することから、それが異本であった可能性が指摘されていることである。[36] もしそうであれば、そこには日授写本にある「事具三千」の説示がなかった可能性も否定できない。

「事具三千」の語の使用が日隆聖人の周辺に限られていることや、日隆聖人が貞舜から学んだ可能性も捨てきれないことを考えると、日隆聖人が当時すでに中古天台用語として存在した「事具三千」の語を日蓮教学用語に転用し積極的に用いたとも考えるのは不自然なことではないだろう。その上で、現行の日授写本が日隆教学の影響下で作成されたものと考えれば、『円極実義抄』の成立を日授写本奥書にある文明八年（一四七六年）頃と考える堀日亨師の説にも妥当性があると言えるのではなかろうか。

いずれにせよ、この問題はさらなる検討を要するものである。本稿が『円極実義抄』成立に関する研究の一助となれば幸いである。

注

（1）天目師の寂年については、佐野妙顕寺の「過去帳」や「墓銘」、光長寺日法聖人『御法門御聞書』による延慶元年（一三〇八年）の説と、『本化別頭仏祖統記』による延元二年（一三三七年）、「過去帳」（『興風叢書』八）による同元年（一三三六年）の説がある。望月歓厚『日蓮宗学説史』（平楽寺書店・一九六八年・四六頁）は一三〇八年説の正統性をにおわせており、池田令道師も一三〇八年の説を採用されている（池田令道「天目・日向の方便品読不読論争について」『興風』一七号・二〇〇五年・一七六頁）。

（2）例えば『日蓮宗宗学全書』では日弁師の著述として扱っており（『宗全』一巻、八七頁。ただしこれについても

「後賢の検覈を待つ」と付記している）、また望月歓厚師の『日蓮宗学説史』では天目師の著作として扱われている（望月歓厚前掲書、四六頁）。また、布施義高師によれば「天目に同調した日弁が集記し自説（私云）を添えたもの」と一応推察できるとされている（布施義高「初期日蓮教学史と本迹論」［『法華仏教研究』一六号・二〇一三年］一二頁）。なお、執行海秀師は両師が同一人物である可能性を示している（執行海秀『日蓮宗教学史』［平楽寺書店・一九五二年］二七―二八頁）。

（3）『宗全』一巻、七三頁

（4）執行海秀前掲書、二九―三〇頁、同『御義口伝の研究』（山喜房佛書林・二〇〇六年）二二二頁。なお、『日蓮宗教学史』には堀日亨師の『熱原法難史』（雪山書房・一九二二年／一九八九年再刊）が注記されているが詳細は不明。

（5）布施義高前掲論文、三七頁の注二七参照。

（6）『法華宗全書増補』（法華宗〔陣門流〕宗務院教学部・一九八七年）第一輯、一三〇頁。布施義高前掲論文、一三頁参照。

（7）望月歓厚前掲書、五〇頁。『円極実義抄』の成立が一三三〇年頃であったとするならば、天目の没年について延慶元年（一三〇八年）ではなく延元二年（一三三七年）の説を採用するか、あるいは天目撰述を疑わざるを得ないことになるのは必然であろう。

（8）執行海秀『御義口伝の研究』、二二〇頁以降

（9）『観心本尊鈔講義』（以下『本尊鈔講義』）上巻、三九九頁

（10）『本尊鈔講義』上巻、六一九頁

（11）『本尊鈔講義』上巻、六四二頁

（12）『日隆聖人全集』（以下『隆全』）一巻、一二九頁

（13）宗祖御遺文中における「事の一念三千」の用例を挙げれば次の如くである。

『諸法実相鈔』（文永十年・『定本遺文』七二四頁）
是即本門寿量品の事の一念三千の法門なるが故也。
『義浄房御書』（文永十年・『定本遺文』七三〇頁）
其故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此経文なり。可レ秘ス可レ秘ス。
『成仏法華肝心口伝身造鈔』（建治元年・『定本遺文』二一〇九頁）
。本門寿量品の事の一念三千の法門此外に尋る事なかれ。穴賢穴賢。
『当体蓮華鈔』（弘安三年・『定本遺文』二一三〇頁）
煩悩即菩提は心の成仏の事なり、生死即涅槃は色の成仏の事なり。此旨能能案ずべし。日蓮が弘通する法門は此事を直ニかきあらはせるなり。事の一念三千とは是なり。我等が胸中にをけば理ノ一念三千、あらはせば事ノ一念三千なり。

(14)『宗全』二巻、六五頁
(15)『宗全』二巻、九一頁
(16) 執行海秀『興門教学の研究』（海秀舎・一九八四年）九九頁
(17) 拙稿「日蓮の「事具三千」に関する一考察―教学用語としての問題点―」（『印度学仏教学研究』六三―二・二〇一五年）
(18) 執行海秀師は「三大秘法」という成語について考察するに際して次のように述べている。「而して今更「三大秘法」てふ成語について研究するといふことは、如何にも宗学を無視したるが如き観がないではない。が併し学的に一応遺文に現れたる「三大秘法」てふ成語の構成課程について考察することも、あながち徒労ではないと思はれるのである。凡そ成語は豊富なる思想内容を有する概念を簡単なる言葉によって表現するものであるから、その構成には相当の歴史性を有するもので、或る概念内容が何等かの言葉によって言い現された用語が段々洗煉されて遂に一定の成

語となるのが普通である。」執行海秀前掲書、二一六頁

(19) 田村芳朗『鎌倉新仏教思想の研究』（平楽寺書店・一九六五年）四二八頁、花野充道『天台本覚思想と日蓮教学』（二〇一〇年・山喜房仏書林）二七六頁参照

(20) 尾上寛仲「柏原談義所の発展」（『印度学仏教学研究』二三―二・一九七五年）六一四頁

(21) 『摩訶止観』の「唯ダ円法ヲ名ケテ為レス善ト。善ク順ズルヲ実相ニ名ケテ為レス道ト」の文に沿わせたもの。（『大正』四六巻、一七頁b）

(22) 「事常住」の語は日隆聖人の文献中にも散見されるが、例えば『本門弘経抄』第六十六巻には、「本門の意は随縁真如事事常住にして、三千依正塵塵法法即法身の当体なり」（『隆全』七巻、一五三頁）とあり、また『開迹顕本宗要集』仏部には「諸経の大日経・迹門等には理常住・事無常と明かし、本門ばかり事常住の随縁真如を明かす」（『日隆聖人御聖教』一巻）とあるように、随縁真如の言い換えとして「事常住」の語が用いられている。

(23) 『大正蔵』四六巻、二八九頁、下段

(24) 『法華宗全書』法華宗興隆学林編・一九九九年

(25) 法華宗教学研究所編・一九七二年

(26) 仏立教学院編・佛立教育専門学校再刊・一九八七年

(27) 『日隆聖人全集』一九二五年（『法華宗本門弘経抄』として再刊・一九七一年）

(28) 『日隆聖人御聖教・開迹顕本宗要集』日隆聖人御聖教刊行会編・一九八二年

(29) 日我師（一五〇八―八六）の『一帖玄文尼崎抄聞書』には、「尼崎独歩の法門に、事の一念三千とは本因・本果・本国土の三妙合論を作る処なり。其の故は、本因妙に九界あり。本果妙に仏界あり。其の仏界と九界と十界互具し、本国土に住するを事の一念三千と云うなり」と紹介されている。

(30) 尾上寛仲「法命集について」（『日本天台史の研究』山喜房仏書林・二〇一四年所収）八二七頁。（初出は『天台学

報』二三・一九八一年）

(31) 大平宏龍「室町時代の日蓮教学と本覚思想」（浅井円道編『本覚思想の源流と展開』平楽寺書店・一九九一年）三九〇～三九一頁参照

(32) 大平宏龍「台当異目深密鈔について」（『印度学仏教学研究』三八―二・一九九〇年所収）参照

(33) 池田令道『富士門流の信仰と化儀』（興風談所・一九九三年）四五四頁。

(34) 日要師による宗義天奏に日忠聖人が尽力したとされる。佐藤博信『中世東国日蓮宗寺院の研究』（東京大学出版会・二〇〇三年）七八頁参照。

(35) 執行海秀『日蓮宗教学史』一四〇頁・一四五頁等

(36) 布施義高前掲論文、一四頁